

感情コーピング尺度(状況版)の作成と信頼性, 妥当性の検証

内 田 香奈子・山 崎 勝 之

美作大学・美作大学短期大学部紀要 (通巻第51号抜刷)

論 文

感情コーピング尺度（状況版）の作成と信頼性，妥当性の検証

Development of the situational version of the Emotional Coping Questionnaire

内 田 香奈子*・山 崎 勝 之**

内田・山崎(2003a, b)では, Stanton, Kirk, Cameron, & Danoff-Burg(2000)の尺度をベースに, 感情表出によるストレス・コーピングの測定が可能な, 感情コーピング尺度(Emotional Coping Questionnaire; 以下ECQ)特性版の開発を行っている。この尺度が作成された背景には, 現在においても様々な問題を抱えるストレス・コーピング研究の現状があった。

その一つに, コーピングの捉え方に関する問題がある。コーピング研究は大きく分けると, 二つの立場で独自に研究が進められている。一方は特定の時点や状況に対するコーピング(situational coping; 以下, 状況的コーピング)を, 一方は, コーピングを比較的安定したものと捉え, 普段のストレスに対するコーピング(dispositional coping; 以下, 特性的コーピング)を重視する立場である。しかしながら, どちらが良いということは一概に言えないのが現状であり, この打開策として, Carver, Scheir, & Weintraub(1989)は双方の比較検証をあらかじめ視野に入れた尺度の開発を提案している。これは両者に共通の尺度構成と尺度項目で, 教示文の変更を行えば比較検証が可能となるように開発する手法である。ECQは両者の比較が可能な尺度開発を目的とし, その手始めとして特性的コーピングの測定が可能な尺度となっている。

今一つの問題としては, 情動焦点型コーピングにおけるストレス反応との交絡の問題があげられた。コー

ピング研究は, Folkman & Lazarus(1980)によって, その概念が大きく問題焦点型コーピング(problem-focused coping)と情動焦点型コーピング(emotion-focused coping)に分けられ, この分類をベースに研究が重ねられている。ここで言う問題焦点型コーピングとは, ストレスの原因への対処を指し, 情動焦点型コーピングとはストレスフルな感情を調整しようとする対処を指す(Folkman & Lazarus, 1980)。先行研究においては, 情動焦点型コーピングは問題焦点型コーピングに比べて健康に対して不適応的という見解(e.g., Billings & Moos, 1984; Endler & Parker, 1990)が見受けられていた。なお, ここで言う交絡とは次のようなことを指す。例えば, Carver et al.(1989)の尺度の中に「私は取り乱し, そのことに気づく」という項目がある。これは明らかに苦痛の入り交じった項目であり, コーピング行動を測定しているのか, 苦痛そのものを測定しているのかの判断がつかない。このように測ろうとしている項目の中に別の要因が入り混じっていることを交絡と呼ぶのだが, Stanton, Danoff-Burg, Cameron, & Ellis(1994)は, この問題が, 情動焦点型コーピングが問題焦点型コーピングに比べて健康に対して不適応的という見解を生み出し, 結果として先行研究の知見を歪める1つの可能性を持つことを示唆している。そして, 彼女ら自身も実際にこの問題を考慮した上でこの尺度を開発している(Stanton et al., 2000)。ECQはStanton et al.(2000)の尺度をベースに開発されており, 実際, 項目収集の際も交絡の問題を十分に配慮したものととなっている。

* 美作大学非常勤講師(兵庫教育大学大学院)

** 鳴門教育大学

また ECQ では、誰かに頼って感情表出によるコーピングを行う他者依存的感情表出と、自分の力で感情表出によるコーピングを行う独立的感情表出の 2 因子が抽出されており、感情表出を様々な角度から捉えることの出来る点、そして Stanton et al. (2000) に比べ、「仲の良い友達に電話をかけて自分の気持ちを聞いてもらう」といった、実際の具体的な行動を捉えることの出来る尺度として、臨床場面での活用が期待される。更に、ECQ では情動焦点型コーピングの詳細な検証のため、大学生や成人用のストレス反応尺度の中で多く使用されている感情の一つである「怒り」と、今一つ多く使用されている抑うつのうち、ストレスサによって生じた感情に限定した「落胆」の 2 種類の感情をストレスサによって生じた感情として設定している。これら 2 つの感情に対するコーピングが測定出来る点でも、情動焦点型コーピングを程度高く、多面的に測定できる尺度になっている。

このように、ECQ は様々な問題を考慮した尺度である。しかしながら先に述べた、特性、状況両アプローチのうち、状況的コーピングについて検証可能な ECQ 尺度は未だ開発作成されないままであり、双方の比較検証を可能なものとするためには、特性、状況両方で、共通の項目ならびに因子構造であること、そしてその信頼性及び妥当性が確認された尺度を作成する必要があった。

これまでの研究に、特性的ならびに状況的コーピング両者の測定を考慮して作成された尺度がないわけではない (CCSC, HICUPS: Ayers, Sandler, West, & Roosa, 1996; COPE: Carver et al., 1989; GCQ: 佐々木・山崎, 2002, 2004; Emotional approach coping scale: Stanton et al., 2000)。しかし、両コーピングが比較できる尺度は数少なく、更には、両方の尺度を用いて健康との関連を検討した研究知見については一貫した結論が得られていないのが現状である。考えられる理由としては、特性と状況の両コーピングを測定する研究の不足に加えて、情動焦点型コーピングの詳細な側面が捉えられて来なかった可能性がある。このことから、情動焦点型コーピングの詳細な測定を可能とする ECQ の特

性版に加えて、状況版の開発が望まれた。

そこで本研究では、感情コーピング測定 (内田・山崎, 2003a, b) の状況版を作成し、信頼性及び因子的妥当性の検討を行うことを目的として行われた。

方 法

調査対象者 因子的妥当性のための調査では 4 年制国立・私立大学大学生・大学院生 484 名を対象とした。うち有効回答者数は男性 (怒り) 197 名 (平均年齢 19.28 歳, *SD* 1.47), 男性 (落胆) 192 名 (平均年齢 19.24 歳, *SD* 1.46), 女性 (怒り) 291 名 (平均年齢 19.14 歳, *SD* 1.27), 女性 (落胆) 293 名 (平均年齢 19.13 歳, *SD* 1.27) であった。

また、安定性の調査では 4 年制国立・私立大学大学生・大学院生を対象とした。2 回の調査から得られた有効回答数は男性 (怒り) 157 名 (平均年齢 19.22 歳, *SD* 1.55), 男性 (落胆) 152 名 (平均年齢 19.17 歳, *SD* 1.43), 女性 (怒り) 234 名 (平均年齢 19.02 歳, *SD* 1.21), 女性 (落胆) 235 名 (平均年齢 19.00 歳, *SD* 1.20) であった。

調査材料 ECQ 特性版 (内田・山崎, 2003a, b) をもとに、教示文ならびに選択肢を次のように変更した。まず教示文については、普段行っているコーピング (特性版) から、最近行っているコーピング (状況版) を問う方向に語尾を修正した。例えば、「イライラしたり、腹が立った」は「イライラしたり、腹が立っている」のように変更した。また、選択肢についても同様で、例えば「いつも行う」は「いつも行っている」のように変更を行った。その後、事前に行われた 30 名を対象とした個別の聞き取りによる予備調査が行われた。なお、予備調査の目的はフェイスシートや教示文について、言いまわしなどを指摘してもらうことであった。そして予備調査の結果を参考に、質問紙の見やすさなどの改善を中心として更に修正を加え、本調査に用いた。

手続き 調査は大学の講義等を利用し、集団実施した。回答者には、例えば怒りの場合、最近直面してい

る、最も‘イライラしたり、腹が立っている’出来事の記入を求めた後、その気持ちをやわらげるため、意識的に行っているコーピングの程度について5件法(1まったく行っていない～5いつも行っている)で回答を求めた。なお、落胆の場合は下線部を‘がっかりしたり、落ち込んでいる’と表現した。また、安定性の調査では約5週間の間隔を置いて同一の調査対象者に2回実施した。

実施時期 予備調査、本調査ならびに安定性の調査を含め2005年3月末から7月の間に実施された。

結 果

ECQ 状況版の因子的妥当性 初めに、ECQ 状況版の因子的妥当性を確認するため、統計パッケージSPSS(Ver.11.5)を用いて、男性における因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。なお、以下の分析については確証的因子分析を除き、すべて同じ統計パッケージを用いた。その結果、固有値1以上で両感情とも、ECQ 特性版と同様の2因子が抽出された。回転前の固有値は怒りで3.05、2.18、落胆で3.15、2.22、

累積寄与率は怒りで52.30%、落胆で53.65%、であった。また、ECQ 特性版における項目選定の際に、当該因子.30以上の項目、他の因子への負荷量が.30未満の項目、当該因子とその他の因子との差が.10以上ある項目、項目間相関が.70以下の項目、という採用基準を設けていた。その結果、項目12番において両感情ともに若干低い値を示したが、ECQ 特性版との比較検討を目的とした尺度作成であったことから、該当項目を残すこととし、最終的に各因子5項目となった。その他の項目に関してはいずれも高い値を示し、その因子的妥当性が確認された(Table1, 参照)。

次に、女性においても男性と同様、因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果、固有値1以上で3(怒り)～4(落胆)因子が抽出された。しかし、固有値の変化パターンや解釈のしやすさ、ならびに特性版との共通性を考え、最終的に2因子が抽出された。回転前の固有値は怒りで3.93、2.85、落胆で4.01、2.77、累積寄与率は怒りで48.39%、落胆で48.42%であった。また、今回の項目はいずれも先ほど述べた項目採用基準を満たしていたため、最終的に各因子7項目となった。当該因子への負荷量について

Table 1 ECQ 状況版の項目と因子負荷量(男性)

No.	項 目 文	因子負荷量	
		怒り	落胆
他者依存的感情表出	1 仲の良い友達に電話をかけて、自分の気持ちを聞いてもらう	.68	.79
	6 仲の良い友達に直接会って、自分の気持ちを話す	.50	.59
	11 置かれている状況とは、関係のない友達に直接会って自分の気持ちを話す	.63	.69
	15 置かれている状況とは、関係のない友達に電話で自分の気持ちを聞いてもらう	.80	.79
	16 仲の良い友達にメールで、自分の気持ちを伝える	.80	.77
独立的感情表出	5 自分の身のまわりにある物に向かって、自分の気持ちを言ってみる	.51	.60
	7 一人で自分の気持ちを叫ぶ	.73	.60
	10 思っていることを一人でつぶやく	.57	.56
	12 いらぬ紙に自分の気持ちを書きなぐる	.19	.22
	13 迷惑にならない場所で、自分の気持ちを声に出す	.80	.75

注) 本来であれば他の因子への因子負荷量を併せて掲載するべきであるが、紙面の関係上その数値を割愛する

は、ほぼ高い値を示し、その因子的妥当性が確認された (Table 2, 参照)。

内的整合性ならびに適合度 続いて、モデル全体の妥当性を検証するため、統計パッケージ Amos (Ver.5.00) を用いて確証的因子分析を行った。その結果、両感情ともに男性は GFI, AGFI で .90 以上、RMSEA で .05 以下の適合度を示し、女性においても両感情ともに GFI, AGFI で .90 以上、RMSEA で .06 以下の適合度を示した。また、内的整合性を検証するための Cronbach の α 係数を算出したところ、男性の独立的感情表出において怒りで $\alpha = .69$ 、落胆で $\alpha = .67$ と、やや低い値を示した。しかし、 $\alpha = .70$ の近似値であったこと、また他の各因子の値に関しては .77 ~ .86 と高い値を示したことから、許容範囲の妥当な内的整合性が確認された (Table 3, 参照)。

因子間相関 因子間相関について、ピアソンの相関

係数を算出した。その結果、男性の因子間に相関が認められなかったが [$r=.13$ (怒り); .04(落胆)], とともに $p>.05$], 女性の因子間に有意な正の相関が認められた [$r=.12$ (怒り), $p<.05$; $r=.16$ (落胆), $p<.01$]。

下位尺度ごとの平均得点, ならびに性差の検討

下位尺度ごとに男女別ならびに感情別の平均値、中央値、標準偏差、そして尖度と歪度をそれぞれ算出した (Table 4, 参照)。平均値は感情間で、ほぼ同じ値を示した。また、尖度と歪度については、独立的感情表出の尖度得点に多少ずれが見られたが、その他の値については、絶対値で 1.80 以下の値を示していた。よって、ECQ 得点分布は正規分布からの歪みが小さいと言える。

安定性の検証 安定性の検討を行った。2回にわたって実施された ECQ の下位尺度ごとに、ピアソンの相関係数を算出した。男女ともに適度な値が得られ

Table 2 ECQ 状況版の項目と因子負荷量(女性)

No.	項目文	因子負荷量	
		怒り	落胆
他者依存的感情表出	1 仲の良い友達に電話をかけて、自分の気持ちを聞いてもらう	.83	.65
	3 置かれている状況とは、関係のない友達にメールで自分の気持ちを伝える	.60	.59
	6 仲の良い友達に直接会って、自分の気持ちを話す	.83	.80
	8 自分のことを理解してくれている人に、自分の気持ちを話す	.72	.53
	11 置かれている状況とは、関係のない友達に直接会って自分の気持ちを話す	.71	.90
	15 置かれている状況とは、関係のない友達に電話で自分の気持ちを聞いてもらう	.58	.64
	16 仲の良い友達にメールで、自分の気持ちを伝える	.52	.58
独立的感情表出	2 ノートに自分の思いを書き出していく	.48	.65
	4 一人のときに、物にあたる	.54	.68
	5 自分の身のまわりにある物に向かって、自分の気持ちを言ってみる	.51	.66
	7 一人で自分の気持ちを叫ぶ	.80	.46
	10 思っていることを一人でつぶやく	.66	.77
	12 いらぬ紙に自分の気持ちを書きなぐる	.81	.30
	13 迷惑にならない場所で、自分の気持ちを声に出す	.36	.50

注) 本来であれば他の因子への因子負荷量を併せて掲載するべきであるが、紙面の関係上その数値を割愛する

($r=.35-.72$, $p<.01$), ECQ の安定性が確認された。

考 察

本研究の目的は、感情コーピング尺度（内田・山崎, 2003a, b）の状況版を作成し、信頼性及び因子的妥当性の検討を行うことであった。その結果、ECQ 特性版と同一の2因子構造であることが確認され、さらに内的整合性の検証結果などからも、ほぼその使用に耐えうる尺度であることが明らかとなった。

しかしながら、今回は Carver et al. (1989) や Stanton et al. (2000) のように、例えば特性版と状況版の因子間の関連などの検討がなされていないこと、また構成概念妥当性についての検証が行われていないことから、今後標準化へ向けて更なる検討課題が残されていると言えよう。

ここで構成概念妥当性について触れておく。構成概念妥当性とは、開発された尺度が本当に測定したい概

念を捉えることが出来ているのかを検証する妥当性である。しかし、実際にはその検証方法が難しく（山崎・内田, 2005）、既存のコーピング尺度においてもその検討がなおざりにされたまま使用されている場合が多い（e.g., Aldwin & Levenson, 1987; Aspinwall & Taylor, 1992）。よって今後、状況的コーピングにおいても、その検証が望まれるところである。

実際、内田・山崎（2003a, b）では仲間評定法などの手法を用いて検証が行われている。仲間評定法とは、尺度を用いて自分が評定した行動と、その人物を良く知る複数の他者によって評価された行動との比較により、構成概念妥当性を検証する方法である。しかし、状況的コーピングの場合、評定される本人が直面しているストレスを第三者が知った上での評定が求められるため、例えば知人の死や、本人にとってトラウマとなるような内面的な問題の場合、従来の仲間評定法では、測定そのものが不可能な場合が生じてくる。

内田・山崎（2005）では ECQ 特性版の構成概念妥当

Table 3 内的整合性ならびに適合度

		男 性				女 性			
		α	GFI	AGFI	RMSEA	α	GFI	AGFI	RMSEA
他者依存的感情表出	怒り	.81	.97	.94	.00	.86	.94	.90	.06
独立的感情表出		.69				.77			
他者依存的感情表出	落胆	.85	.96	.93	.04	.85	.95	.92	.04
独立的感情表出		.67				.77			

Table 4 ECQ状況版の統計量

	他者依存的感情表出				独立的感情表出			
	女性怒り	女性落胆	男性怒り	男性落胆	女性怒り	女性落胆	男性怒り	男性落胆
平均値	16.38	16.66	9.49	9.84	11.26	10.88	6.95	6.92
中央値	16.00	17.00	9.00	9.00	10.00	10.00	6.00	6.00
標準偏差	6.20	6.15	4.22	4.60	4.39	4.24	2.69	2.63
歪度	.50	.33	1.03	.97	1.58	1.72	1.50	1.78
尖度	-.37	-.47	.91	.26	3.81	4.51	1.85	3.32

性の追研究として、従来の仲間評定法を用いた上で、更にその精度をあげるため、本人にとって自分のことを良く分かっている人を直接選んでもらい、お互いを評定させる形式による検証を試みている。今後の検証では、上記の方法を発展させる形で、例えば本人に自分のストレスを開示している第三者を複数指名してもらった上で、その者による行動評定との本人の評定との比較を行うなど、何らかの方法での追求が求められる。

また、上述の問題とは別に、状況的コーピングにおける根本的な問題として、主に以下のことがあげられる。今回は、ある特定の時点や状況を設定するため、最近直面している、最も怒り（または落胆）を感じた出来事をあげてもらい、それに対するコーピングへの回答を求めた。しかし、この時間軸や状況設定についても先行研究においては各研究者によって様々な設定がなされ、研究が進められている。例えば過去のある一定期間を研究者側が設定し、その間に経験したストレスフルな状況に対するコーピングを問うもの（e.g., Amirkhan, 1990; McCrae, 1984）、また試験といった特定のストレスフルな状況をこちらで設定し、その出来事に対するコーピングを測定するもの（e.g., Bolger, 1990; Carver et al., 1989）、そして今回のように現在、あるいは最近直面しているストレス状況を回答してもらった上で、それに対するコーピングを問うもの（e.g., Stanton et al., 2000）などがあげられる。今回、最近のストレスフルな状況を捉えることに至った過程は、過去のストレスフルな状況が、現在直面しているストレスフルな状況とは限らないこと、そして、試験などのストレスが本人にとってストレスであるか否かは一概に結論づけられないことからの判断であった。しかし、今回の尺度では最近のストレスフルな状況を量的な側面からも捉え切れていない以上、今回得られたものが本人にとっての重要なストレスに対するコーピングか否かは判断できないという問題が残る。このことからそれぞれの測定法は一長一短であり、その是非については一概に結論づけることは出来ないが、今後の問題として検討を行う姿勢が望まれる。

以上のことから、一部の課題は残したものの、状況的コーピングが測定可能な ECQ が開発された。今後は特性的コーピングとの比較検討も含めて ECQ と健康との因果関係の検討を行う必要があろう。そして、こうした新たな研究を行うことが、これまでの情動焦点型コーピングに関わる研究の混乱を打開する知見をもたらすことが期待される。

謝 辞

本研究にあたり、鳴門教育大学木内陽一先生、梶井一暁先生、高知大学内田純一先生、岡谷英明先生、美作大学渡邊義雄先生、妻藤真彦先生、堀川涼子先生、ならびに各大学の学生の皆様、多くの皆様にご協力頂きました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

引用文献

- Aldwin, C. M. & Revenson, T. A. (1987). Does coping help? A reexamination of the relation between coping and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 337-348.
- Amirkhan, J. H. (1990). A factor analytically derived measure of coping : The coping strategy indicator. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 1066-1074.
- Aspinwall, L. G., & Taylor, S. E. (1992). Modeling cognitive adaptation: A longitudinal investigation of the impact of individual differences and coping on college adjustment and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 989-1003.
- Ayers, T. S., Sandler, I. N., West, S. G., Roosa, M. W. (1996). A dispositional and situational assessment of children's coping: Testing Alternative models of coping. *Journal of Personality*, **64**, 923-958.
- Billings, A. G., & Moos, R. H. (1984). Coping, stress, and social resources among adults with unipolar depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 877-891.
- Bolger, N. (1990). Coping as a personality process: a prospective study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 525

- Carver, C. S., Scheier, M. F., & Weintraub, J. K. (1989). Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 267-283.
- Endler, N. S., & Parker, J. D. A. (1990). Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 844-854.
- Folkman, S., & Lazarus, R. S. (1980). An analysis of coping in a middleaged community sample. *Journal of Health and Social Behavior*, **21**, 219-239.
- McCrae, R. R. (1984). Situational determinants of coping responses: Loss, threat, and challenge. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 525-537.
- 佐々木恵・山崎勝之 (2002). コーピング尺度 (GCQ) 特性版の作成および信頼性・妥当性の検証 日本公衆衛生雑誌, **49**, 399-408.
- 佐々木恵・山崎勝之 (2004). 敵意と健康状態の因果関係における状況的コーピングの媒介機能. 健康心理学研究, **17**, 1-9.
- Stanton, A. L., Danoff-Burg, S., Cameron, C. L., & Ellis, A. P. (1994). Coping through emotional approach : Problems of conceptualization and confounding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 350-362.
- Stanton, A. L., Kirk, S. B., Cameron, C. L., & Danoff-Burg, S. (2000). Coping through emotional approach : Scale construction and validation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1150-1169.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2003a). 大学生用感情コーピング尺度 (ECQ) の作成 - 因子的妥当性と信頼性に関する予備的研究 日本心理学会第 67 回大会発表論文集 1309.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2003b). 大学生用感情コーピング尺度 (ECQ) の作成と信頼性, 妥当性の検討 日本健康心理学会第 16 回大会発表論文集 290-291.
- 内田香奈子・山崎勝之 (2005). 感情コーピング尺度における標準化の試み - 妥当性の検証 - 日本心理学会第 69 回大会発表論文集 1378.
- 山崎勝之・内田香奈子 (2005). 調査研究における質問紙の作成過程と適応上の諸問題 鳴門教育大学研究紀要(教育学編), **20**, 1-10.

(2005年12月1日 受理)